発生構文と位置変化構文

矢 澤 真 人

キーワード：発生構文、位置変化構文、ニ格、語順

要　旨

語順調査から、ガ格・ヲ格・ニ格の相互の出現位置を規定してゆくと、場所ニ格をとるニ格他動詞構文は、「主体ガ格→場所ニ格（発生点）→発生物ヲ格→生産動詞」という構文パターンをとる発生他動詞構文と、「主体ガ格→既存物ヲ格→場所ニ格（着点）→位置変化動詞」という構文パターンをとる位置変化他動詞構文と二つに大きく分類される。いわゆる壁塗り構文の「壁にペンキを塗る」という構文は、構造格の語順からは発生他動詞構文に、ヲ格名詞が既存物であるという点で位置変化他動詞構文に、情態修飾関係からは状態変化他動詞構文に近いという、複合的な構文パターンをとる。

0. はじめに

動詞の格体制の記述は、一つの動詞に、表層的な格を列挙する形で示すのが普通である。これは、日本語においては、格成分や連用修飾成分に、相互に定まった語順が存在しない、もしくは語順の規定が緩やかであるという見方を反映するものだといえる。

一方、これと相反する観察、格成分や連用修飾成分にも一定の語順がみられるとする見解も少なくない。ガ格とヲ格の相互の語順はガ格が先行することは古くから指摘されているし、いわゆる存在構文（位格文）においては、ニ格がガ格に先行することもよく知られている。連用修飾成分相互の語順や連用修飾成分とヲ格との位置関係、場所デ格と道具デ格の位置関係などについても一定の傾向が認められる[*1]。

ガ格とヲ格は、構文の骨格となる成分であることを表す構造格である。この二つの構造格がデフォルトで「ガ格－ヲ格」という語順であることが知られながらも、日本語の語順の規定が難しいのは、その他の成分の出現位置がはっきり定まらないということによる。

特に、ニ格は、ガ格やヲ格同様、構造格としての機能を持ちながら、ガ格やヲ格に先行もし後続もする。連用修飾成分との境界もはっきりせず、どのような意味役割を表すのかについても不分明なところが少なくない。日本語の語順や構文の型を捉えにくくしている原因の一つがニ格にあるといっても過言ではないだろう。

本稿においては、ニ格をとる他動詞構文（ニ格他動詞構文）のうち、場所ニ格をとるものの分類を試み、さらに、語順と構文との関わりを検討する。これを通じて、平板的な動

詞の格体制を立体的な構文の型として捉える可能性を探る。

本稿の結論を示しておく。場所ニ格をとるニ格他動詞構文は、発生他動詞構文（生産構文）と位置変化構文とに大きく分かれ、発生他動詞構文は、(1)bのように、場所ニ格が発生物ヲ格に先行し、結果修飾成分はこの間に現れる傾向があるのに対し、位置変化構文は、(2)bのように、既存物ヲ格が場所ニ格に先行するのが典型的な語順であると認められる。また、いわゆる「壁塗り構文」は、場所ニ格がヲ格に先行する点では発生構文に、また、ヲ格名詞が既存物である点で位置変化構文に近く、結果修飾成分がヲ格に後続する傾向にあるという点で状態変化他動詞構文に近い複合的な構文パターンを取る。

(1)a　太郎が　庭に　深く　穴を　掘った
　b　主体ガ格→場所ニ格（発生点）→結果修飾成分→結果ヲ格（発生物）→生産動詞
(2)a　太郎が　荷物を　倉庫に　運んだ
　b　主体ガ格→対象ヲ格（既存物）→場所ニ格（着点）→位置変化動詞

1. ニ格構文の分類

1.1. ニ格の出現位置

相対的な語順の一定しているガ格・ヲ格との関わりから、「ニ」でマークされる成分の出現位置を見てみよう。

使役や受け身のニ格は、使役者ガ格や受動者ガ格に後続し、埋め込み文のヲ格やニ格に先行する位置が標準的な出現位置である。しかし、それ以外の「ニ」でマークされる成分は、その出現位置を特定しがたい。たとえば、次のように、場所ニ格、原因ニ格、結果修飾成分、時ニ格のいずれもがガ格やヲ格との相対的な語順が一定しない。

(3)a　駅前に　交番が　ある
　b　太郎が　地面に　穴を　掘った
　c　太郎が　荷物を　部屋に　運んだ
(4)a　太郎が　妻の浮気に　困っている
　b　妻の浮気に　太郎が　対応に　困っている
(5)a　太郎が　壁を　真っ赤に　塗った
　b　白地に　赤く　日の丸　染めて
(6)a　三時に　太郎たちが　家に　帰ってきます
　b　太郎が　リンゴを　腐る前に　売りさばいた
(7)a　一方的な輸出攻勢に　近隣諸国の悲鳴が　あがっている
　b　近隣諸国が　一方的な輸出攻勢に　悲鳴を　あげている

c　一方的な輸出攻勢に　近隣諸国が　悲鳴を　あげている

しかし、これは見かけ上のことで、構文ごとに見ると、出現位置の制限されるニ格も少なくない。たとえば、(3)b・cは、後に詳しく見るように、それぞれこの位置に現れる傾向が強く、(4)bも「花子の浮気に」と「対応に」の位置を交換することはできない。(7)bの原因ニ格はガ格と逆転しても、さほど位置の意図的な変更とは感じられないが、(7)aを逆転させるときわめて不自然になる。安1997で指摘された「コンテンツ構文」のニ格もやはりガ格との位置の逆転を許容しない。

(8)a ?対応に　太郎が　花子の浮気に　困っている
　b ?近隣諸国の悲鳴が　一方的な輸出攻勢に　あがっている
(9)a　この町が　活気に　満ちあふれていること
　b　活気に　この町が　満ちあふれていること

このように見ていくと、ニ格はおおよその出現位置から、三つのタイプをたてることができる。

(ア)相手や場所、結果状態など、動詞固有の素性に関わって出現位置や意味役割を変える、動詞句づくりに関わる成分。
(イ)使役や受け身など、(ア)の関わる動詞句をもとに、さらなる文作りに関わるニ格。このニ格の階層以降が二重構造の内側に入ることを表すマーカーとしても機能する。
(ウ)時ニ格や原因ニ格など、動詞の如何に関わらず、場面設定の階層に現れて出来事を導いたり、主体ガ格の前後に現れて動きを導いたりする成分[*2]。

1.2. 原因ニ格と起因ニ格

先に見たように、「困る」は、「妻の浮気に」と「(妻の浮気の) 対応に」という二つのニ格が現れる。和気1996は、動詞の格体制に含まれる原因ニ格を「起因」とよび、また、動作主自対の動きを表す名詞をとるニ格を「範囲」と呼んでいるが、この名称に従えば、(10)・(12)の「対応に」は範囲ニ格であり、(12)の「花子の浮気に」は起因ニ格となる[*3]。いずれも「困る」の格体制に含まれる(ア)の成分である。

(10) 妻の浮気に　太郎が　対応に　困っている
(11) 太郎が　妻の浮気に　困っている
(12) 太郎が　妻の浮気の対応に　困っている

ところが、(10)の「妻の浮気に」は、和気の基準に従えば、二重ニ格制限に抵触するため、動詞の格体制に含まれる起因ニ格とはいえない。これは、「太郎が対応に困る」という出来事を導く(ウ)の原因ニ格と見なすのが適当であろう。原因ニ格は、次のように原因デ格と近い語順属性を持つが、原因ニ格と範囲ニ格の組み合わせや原因デ格と起因ニ格の組み合わせと比較すると、原因ニ格と起因ニ格の組み合わせは許容度が落ちる。意味格であるデ格では、二重の原因デ格や二重の場所デ格が許容されるのに対し、ニ格では多少の制限があるのは、これらのニ格にも構造格的な側面を持つからだと考えられる。

(13)a　近隣諸国が　輸出攻勢に／で　悲鳴を　あげている
　　b　輸出攻勢に／で　近隣諸国が　悲鳴を　あげている
　　c　輸出攻勢に／で　近隣諸国の悲鳴が　あがっている
　　d－近隣諸国の悲鳴が　輸出攻勢に／で　あがっている[*4]
(14)a　妻の慰謝料の請求に　太郎は　金繰りに　困っている
　　b　妻の慰謝料の請求で　太郎は　金に　困っている
　　c－妻の慰謝料の請求に　太郎は　金に　困っている。

場所ニ格の多くは(ア)の構造格に入るが、所有者ニ格には、ガ格に先行し、時に他のニ格と共起して二重ニ格制限に関わらないという点で、(ウ)の成分と見なした方がよいものもある。(15)aの「太郎に」や(15)bの「気持ちに」は「ない」の格体制内の場所ニ格と見なすことができるが、(15)bの「太郎に」は(ウ)の成分と見なせる。

(15)a　太郎に　気持ちの余裕が　ないこと
　　b　太郎に　気持ちに　余裕が　ないこと

(ウ)の成分は、次の＊の位置に出現するのが基本的な位置であると考えられる。使役や受け身に現れるニ格も、使役者ガ格や受動者ガ格に後続し、埋め込み文のニ格やヲ格に先行する位置が基本的な位置だと考えられる。こういった点で、比較的、(イ)や(ウ)の成分は出現位置が限られているといえよう[*5]。

(16)a　(　場面設定　)(　出来事　(動き　))
　　b　(＊　主題ハ　＊)(＊主体ガ格＊　(対象ヲ格　動詞))
　　c　(＊　主題ハ　＊)(＊使役者ガ格＊　(＊被使役者ニ格＊　(対象ヲ格　動詞)))

2. ニ格自動詞構文の分類

2.1. 場所ニ格の出現位置

では、(ア)の成分には、ガ格やヲ格との相対的な語順が規定できるのであろうか。

ここですべてのニ格とガ格、ヲ格の組み合わせを検討する余裕はないので、場所ニ格に限定して、ガ格やヲ格との組み合わせを見ていこう。

場所ニ格とガ格、ヲ格の組み合わせを考えると、都合、次の5パターンあることになる。

(17)a　ニ格→ガ格
　　b　ニ格→ガ格→ヲ格
　　c　ガ格→ニ格
　　d　ガ格→ニ格→ヲ格
　　e　ガ格→ヲ格→ニ格

2.2. 場所ニ格が先行する自動詞構文

まず、場所ニ格がガ格に先行する(17)aの語順をとる自動詞構文には、存在構文と発生構文とがある。存在構文は、「場所ニ格→既存物ガ格→存在動詞」という組み合わせを典型とする。(18)cのような所有構文や、コンテンツ構文である(19)の代換型の(18)dのようなものも、存在構文の一種と見なせよう。この組み合わせと語順は、位格文なり存在構文という構文タイプとして、すでに認知されていよう。

(18)a　駅前に　交番が　ある
　　b　業績に　中途半端なものが　多い
　　c　末娘に　孫が　いる
　　d　太郎に　配慮が　欠ける（こと）
　　e　日本に　資源が　乏しい（こと）
(19)a　太郎が　配慮に　欠ける（こと）
　　b　日本が　資源に　乏しい（こと）

発生構文は、場所名詞のニ格と「霧がでる」「錆が浮く」「汗がにじむ」「芽が生える」「蛆がわく」など、新たに現れた物名詞と発生動詞の組み合わせを典型とする。人ニ格の(21)も発生構文に含まれる。

(20)a　山に　霧が　でる
　　b　表面に　錆が　浮く

c　額に　汗が　にじむ
d　枝先に　芽が　生える
e　ゴミ箱に　蛆が　わく
(21)a　娘に　子供が　生まれる
b　部下に　動揺が　走った

和気1996や安1996では、位置変化動詞と共起する場所ニ格の一部がガ格と位置を変えることで、着点と発生点の解釈の違いが生じることが指摘されている。これは、ニ格名詞と着点と見なすか発生点と見なすか、また、ヲ格名詞を既存物と見なすか発生物と見なすかという認知に、語順情報が関与していることを示す。「既存物ガ格→場所ニ格（着点）→位置変化動詞」という位置変化構文と、「場所ニ格（発生点）→発生物ガ格→発生動詞」という発生動詞構文との、構文パターンの違いが関わっているのである。

(22)a　胸元に汗が滴る　（胸元に汗が滴るほど出ている）
b　汗が胸元に滴る　（汗が胸元へと滴り落ちる）
(23)a　尿に血液が混じる（血液が尿に混じって出てくる）
b　血液が尿に混じる（血液が尿に混ざってしまう）

発生構文は、存在構文ときわめて近い構文タイプであり、(24)のようなものは発生構文か存在構文か迷うところであろう。存在動詞とは、既存物か発生物か、動作性を持つか否かなどといった点で区別されるが、発生構文のシテイル形のものには、もはや存在構文と見なした方がよいものもある。後に見るように、発生他動詞構文では、場所ニ格がガ格とヲ格の間に出現するのが自然な語順と思われる。シテイル形もやはりこの語順が自然で、(26)bのように、場所ニ格をガ格より先に出すと、特別な処置を加えたように感じられる。しかし、(27)のような文では、場所ニ格がガ格に先行してもさほど特別な処置を加えたという感じがしない。(17)bは、場所ニ格の先行と述部の存在－状態化によって、発生他動詞構文が存在構文相当になったものと考えるのが適当であろう。

(24)a　子供に　ストレスが　たまる
b　目に　涙が　あふれる
(25)a　子供に　ストレスが　たまっている
b　目に　涙が　あふれている
(26)a　太郎が　満面に　笑みを　湛えている
b ?満面に　太郎が　笑みを　湛えている
(27)　国立公園内に　市民団体が　立入禁止区域を　設置している

2.3. ガ格が先行する自動詞構文

(17)cのガ格が場所ニ格に先行する構文には、位置変化動詞構文と位置関係構文とがある。すでに、「既存物ガ格→場所ニ格（着点）→位置変化動詞」という位置変化動詞構文のパターンは示した。(29)のように、本来場所ニ格をとらない移動形態動詞が、しばしばこの構文パターンで用いられることがある。従来、これは別の格パターンとしてそれぞれの動詞に記述していたが、隣接構文タイプへの移行として、構文タイプレベルで記述しておく方がよいだろう。(31)のようなものは、位置変化動詞が「主体ガ格→場所ヲ格（経路）→移動形態動詞」という構文パターンで用いられたものである。さらに、(32)のような表現も雑誌の特集の見出しなどで用いられることがある。この場合、「主体ガ格→対象ヲ格→他動詞」という構文パターンで用いることで、「乗りこなす」「乗り回す」といった意図的に対象に働きかける解釈が可能となっている。動詞固有の格体制から外れる「二一世紀を生きる」「哲学を遊ぶ」などが解釈可能なのも、構文タイプを支えとして解釈がなされるからである。

(28)a　太郎が　歩く
　　b　太郎が　走る
　　c　太郎が　飛ぶ
(29)a　太郎が　一塁に　歩く
　　b　太郎が　敵陣に　走る
　　c　太郎が　アメリカに　飛ぶ
(30)a　学校に　行く
　　b　第２ポイントに　進む
　　c　危険地帯に　入る
(31)a　独自路線を　行く
　　b　第２ルートを　進む
　　c　間道を　入る
(32)　ポルシェを　乗る

位置関係構文は、(33)のような二つの場所の位置関係を示すものである。これらの場所ニ格は基準点を表すものである。状態性の述語で、(34)aのように、複数主体のガ格を取る構文パターンもある。なお、(34)bのようなト格は、相手ではなく、単数主体に複数性をもたらす意味格と見なし、「ガ格→ト格→対称性述語」という構文パターンは認めないでもよかろう。

(33)a　家が　学校に　近い

b　道が　河に　沿っている

(34)a　家と学校が　近い

b　家が　学校と　近い

3. 位置変化他動詞構文と発生他動詞構文

3.1. 語順テストと構文タイプ

以上、自動詞構文について、簡単に見てきたが、場所ニ格をとる他動詞構文については実際の語順傾向から検討しよう。

矢澤1992において、所定の要素から任意の４つを選んで一セットとし、それをもっとも自然と考えられる語順に並び替えるというテストを行った。これをもとに、状態変化構文と位置変化構文、及び相手構文の語順の傾向を考察したが、そこでも、また、それに続く矢澤1993・1994でも、階層内での逆転現象を認めながらも、最終的にはガ格・ヲ格を軸にした、「一通りの語順」を導くことをもくろんでいた。しかし、実際には、後に見るように、軸となるヲ格にも明らかな階層差が見られる。従って、動詞句を構成する構造格や情態修飾成分の語順分析と、格体制やその語順の傾向から試みる構文パターンの抽出を同時に進めていく必要がある。語順は、先の(ウ)の成分のような「一通りの語順」で処理できるものと、構文タイプごとに記述すべきものとに分けて考察すべきなのである。

ここでは、場所ニ格をとる他動詞構文のうち、位置変化動詞「運ぶ」と発生動詞「掘る」、および、壁塗り代換を生じる「塗る」の語順を比較する。

語順テストは矢澤1992と基本的には同じである。調査の結果をまず表1～表3で示す。表中の「総数」は、その語が選択されたセット数、「平均位置」は平均して文頭から何番目にくるか、「配列度」はそれを0～100の度合いになおしたものである。たとえば、表1の「1 太郎が」は、「太郎が」を選択したセットが全部で205あり、平均すると先頭から1.9番目に現れることを示す。「ねえねえ」は1であるから常に先頭であり、「昨日」はこれに次ぐ。これらを含むセットでは「太郎が」よりもこれらの方が先行しやすいことが予測される。

なお、「運ぶ」はすべて共起しうる成分を候補群としているのに対し、「掘る」と「塗る」には、異なった格パターン（「地面を／地面に穴を」「壁にペンキを／壁をペンキで」）を候補群に含んでいるため、単純に平均位置を比較することはできない。そこで、表4～表6で、各成分が他の成分に先行するか後続するかを表し、ここから相対的な語順傾向を見ることにする。表の右の行に先行する成分を、上の列に後続する成分を配し、数値は、その二つの成分を使った例の総数と、右側の行の成分が先行する数を示した。たとえば、表4の3行4列目の「18/29」は、「荷物を」と「ゆっくりと」を選んだセットが29あり、そのうちの18セットが、「荷物を」は「ゆっくりと」に先行するのが自然だと見なしたことを示す。

表1　位置変化他動詞構文　　セット数=255

番号	語	総数	平均位置	配列度
9	ねえねえ	59	1	0
7	昨日	134	1.33	11
1	太郎が	205	1.9	30
6	花子と	91	2.12	37
4	工場で	55	2.45	48
5	フォークリフトで	87	3.01	67
2	ゆっくりと	48	3.29	76
3	荷物を	209	3.37	79
8	倉庫に	132	3.57	86

表2　発生他動詞構文　　セット数=126

番号	語	総数	平均位置	配列度
8	昨日	34	1.28	9
1	太郎が	115	1.46	15
9	花子と	39	2.1	37
5	地面に	35	2.63	54
7	スコップで	52	2.81	60
2	地面を	58	3.02	67
4	ざくざく	28	3.39	80
3	深く	46	3.52	84
6	穴を	67	3.85	95

表3　壁塗り構文　　セット数=330

番号	語	総数	平均位置	配列度
5	太郎が	276	1.14	5
7	応接間で	41	1.68	23
2	壁に	127	2.24	41
1	壁を	159	2.25	42
6	刷毛で	102	2.57	52
4	ペンキで	137	2.64	55
3	ペンキを	147	2.94	65
8	白く	191	3.69	90
9	ぺたぺたと	140	3.69	90

表4　位置変化他動詞構文の相対的語順

先＼後	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 太郎が		25/26	174/177	25/35	60/65	36/75	11/99	99/100	0/38
2 ゆっくりと	1/26		11/29	4/16	6/23	1/11	0/13	11/16	0/10
3 荷物を	3/177	18/29		3/36	32/65	1/65	2/107	73/112	0/36
4 工場で	10/35	12/16	33/36		9/9	10/21	1/29	10/10	0/9
5 フォークリフトで	5/65	17/23	33/65	0/9		3/18	0/32	28/39	0/10
6 花子と	39/75	10/11	64/65	11/21	15/18		4/36	28/28	0/19
7 昨日	88/99	13/13	105/107	28/29	32/32	32/36		60/61	0/25
8 倉庫に	1/100	5/16	39/112	0/10	11/39	0/28	1/61		0/30
9 ねえねえ	38/38	10/10	36/36	9/9	10/10	19/19	25/25	30/30	

表5　発生他動詞構文の相対的語順

先＼後	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 太郎が		53/53	41/41	24/24	30/30	61/61	46/46	14/56	23/34
2 地面を	0/53		22/23	15/18	0/0	2/2	16/28	0/31	2/19
3 深く	0/41	1/23		1/2	1/11	17/22	1/14	0/15	1/10
4 ざくざく	0/24	3/18	1/2		1/2	7/8	5/15	0/11	0/4
5 地面に	0/30	0/0	10/11	1/2		33/34	4/10	0/12	0/6
6 穴を	0/61	0/2	5/22	1/8	1/34		3/24	0/30	0/20
7 スコップで	0/46	12/16	13/14	10/15	6/10	21/24		0/16	0/3
8 昨日	42/56	31/31	15/15	11/11	12/12	30/30	16/16		17/21
9 花子と	11/34	17/19	9/10	4/4	6/6	20/20	3/3	4/21	

表6　壁塗り構文の相対的語順

先＼後	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 壁を		0/1	4/5	79/110	2/13	20/32	1/9	128/135	45/49
2 壁に	1/1		84/103	16/20	7/101	25/46	1/16	36/37	54/57
3 ペンキを	1/5	19/103		0/2	3/117	32/67	2/29	30/39	69/79
4 ペンキで	31/110	4/20	2/2		5/117	3/3	0/6	110/117	32/36
5 太郎が	134/136	94/101	114/117	112/117		72/74	20/33	150/153	94/97
6 刷毛で	12/32	21/46	35/67	0/3	2/74		0/3	31/34	45/47
7 応接間で	8/9	15/16	27/29	6/6	13/33	3/3		13/15	10/12
8 白く	7/135	1/37	9/39	7/117	3/153	3/34	2/15		28/43
9 ぺたぺたと	45/49	3/57	10/79	4/36	3/97	2/47	2/12	15/43	

3.2. 位置変化他動詞構文と発生他動詞構文の構文パターン

上の調査結果から、次のような語順の傾向を見いだすことができる。

(35)「運ぶ」構文では、「荷物を」が「倉庫に」に先行しやすい。
(36)「掘る」構文では、「地面に」が「穴を」に先行する。
(37)「塗る」構文でも、「壁に」が「ペンキを」に先行する。
(38)「掘る」構文では、「深く」が「地面に」と「穴を」の間に出る。
(39)「塗る」構文では、「白く」は「壁を」や「ペンキを」に後続する。
(40)「運ぶ」構文の「荷物を」は「フォークリフトで」と相互に語順を入れ替えやすい。
(41)「掘る」構文の「地面を」は、「スコップで」と相互に語順を入れ替えやすい。
(42)「掘る」構文の「穴を」は、「スコップで」に後続し、語順の入れ替えはしにくい。
(43)「塗る」構文の「壁を」は、「刷毛で」「ペンキで」に先行する傾向にあるが、語順の入れ替えも可能である。
(44)「塗る」構文の「ペンキを」は、「刷毛で」とは語順を入れ替えやすい。

以上の点から、明らかに、位置変化他動詞構文と発生他動詞構文とでは、語順の傾向が異なり、前者では「主体ガ格→既存物ヲ格→場所ニ格（着点）→位置変化他動詞」という

構文パターンが、後者では「主体ガ格→場所ニ格（発生点）→発生物→発生他動詞」という構文パターンが見て取れる。

また、「運ぶ」の「荷物を」、「掘る」の「地面を」、「塗る」の「ペンキを」はいずれも道具デ格と相互に語順が入れ替えやすく、いずれも対象ヲ格と見なすことができる[*6]。また、「塗る」の「壁を」も対象ヲ格に近いものと見なせそうである。しかし、明らかに発生物ヲ格は異なった階層にあると考えられる。

矢澤1992で見たように、状態変化他動詞構文では、「コップを粉々に割る」のように、結果修飾成分は対象ヲ格に後続する位置をとる。「塗る」構文の「壁をペンキで白く塗る」や「壁にペンキを白く塗る」、「掘る」構文の「地面を深く掘る」は、いずれもこの点では、状態変化他動詞構文と同様の現れ方である。しかし、発生物ヲ格をとる「掘る」構文の「地面に深く穴を掘る」では、場所ニ格と生産物ヲ格の間に出現するという特殊な出方をしている。発生物の出現が場所ニ格へ影響を与え、場所ニ格の状態変化をもたらすからだというという解釈、たとえば、「山に白く雪が降る」は「白い雪が降って山が白くなる」のだから、状態変化する「山」のあとに変化する状態を表す「白く」が位置するのは自然であるといったような解釈も成り立ちそうだが、それだけでは、「壁にペンキを塗る」という構文では「壁が白く」なるにもかかわらず、この位置に現れないので説明に詰まってしまう。

和気1996では、(45)のような既存物が移動先で状態変化を起こす例をあげている。これらの文に結果修飾成分を加える場合、やはりヲ格の後の方が自然な語順であろう。

(45)a　アルミ皿に　ろうそくを　溶かす
　　b　てんぷら鍋に　油を　熱する
　　c　ボールに　卵白を　泡立てる
(46)a　アルミ皿に　ろうそくを　どろどろに　溶かす
　　b－アルミ皿に　どろどろに　ろうそくを　溶かす
(47)a　てんぷら鍋に　油を　熱く　熱する
　　b－てんぷら鍋に　熱く　油を　熱する
(48)a　ボールに　卵白を　白く　泡立てる
　　b－ボールに　白く　卵白を　泡立てる

「ペンキ」や「ろうそく」「油」「卵白」はいずれも既存物である。端的に言えば、結果修飾成分との語順は、ヲ格名詞が既存物か発生物かで決まる。発生物ヲ格は、結果修飾成分と同じ、より動詞に近い階層が基本的な出現位置であり、一方で、意味的に場所ニ格に状態変化がもたらされるところから、結果修飾成分は場所ニ格に近づく。このため、発生他動詞構文ではヲ格と結果修飾成分との語順の逆転現象が起きると考えられる。

「壁にペンキを塗る」という構文は、構造格の体制からは発生他動詞構文的で、情態修飾関係の修飾構成の面からすると変化他動詞構文的、既存物ヲ格をとる点で位置変化他動詞構文的であるといったような複合的な構文パターンであるといえよう。

4. おわりに

以上、場所ニ格をとる構文について、出現位置の観点から、構文パターンを抽出し、構文タイプをたてることを試みた。ニ格には和気1996の指摘したものでも、相手ニ格や範囲ニ格、目標ニ格など種々のものがある。同じ相手構文でも、具体物の移動を伴うものと所有権の移動を表すものとでは同じ語順傾向なのか、「コップを粉々に割る」のような情態変化他動詞構文の結果修飾成分と、「太郎を委員に推薦する」のような認定動詞の「ニ」でマークされる成分とは出現位置に差があるのか等、まだ調査が及んでいない。特に、このような実験的な語順調査で出た傾向と、書かれたものの傾向との対比は欠かせないが、これについても次の機会に送らざるを得ない。

注

*1 佐伯1975、野田1984、矢澤1983、矢澤1992、矢澤1994等参照

*2 場面設定の階層については矢澤1992・矢澤1994参照。

*3 ガ格に先行する「起因」は、太郎の困惑状態を導く原因格とも、「ガ格→起因ニ格」構文の倒置型とも解釈可能であろう。なお、

妻の浮気に　太郎が　困っている

－妻の浮気の対応に　太郎が　困っている

のようにニ格をガ格に先行させると、　の方がいささか許容度が落ちるようである。これは、「太郎が困っている（妻の浮気）／－太郎が困っている（妻の浮気の対応）」のような連体修飾構造でも並行的である。起因ニ格と範囲ニ格とでは、さらに階層的な差異が想定できそうである。

*4 用例判断の「－」は相対的に許容度が低いことを表す。

*5 場所デ格、原因デ格の出現位置とそれぞれの機能については、矢澤1994参照。

*6 道具デ格と対象ヲ格が同じ階層に現れることについては、矢澤1992参照。

参考文献

安平鎬1996「自動詞文の格の代換について――「発生」と「位置変化」について「あふれる」を中心に――」『日本語と日本文学』23（筑波大学国語国文学会）

安平鎬1997「contentsのニ格構文をめぐって」『筑波日本語研究』2（筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室）

奥津敬一郎1981「移動変化動詞文――いわゆるspray paint hypallageについて――」『国語学』127

佐伯哲夫1975『現代日本語の語順』笠間書院

野田尚史1984「副詞の語順」『日本語教育』52
矢澤真人1983「状態修飾成分の整理――被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察――」『日本語と日本文学』3（筑波大学国語国文学会）
矢澤真人1992「格の階層と修飾の階層」『文藝言語研究　言語篇』21（筑波大学文芸・言語学系）
矢澤真人1993「副詞句と名詞句との意味的相関をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』58-1（至文堂）
矢澤真人1994「『格』と階層」『森野宗明教授退官記念論文集　言語・文学・国語教育』（三省堂）
和気愛仁1996「『に』の機能」『筑波日本語研究』創刊号（筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室）

（1997年10月2日 受理）

追記　――「特集　ニ格構文」について

本号のニ格構文の特集についていささかふれておく。

昨年度の筑波大学大学院文芸・言語研究科言語学専攻の「日本語文法研究」では、「ニ格」を年間テーマとし、ニ格の出現位置と構文タイプに関する問題や、ニ格の意味役割の整理、ニ格の省略（ニ格相当の無格名詞句）、コンテンツ構文など特殊なニ格構文、「に」と「で」、「に」と「を」、「に」と「として」など、種々の問題について扱った。今回、それぞれのテーマ提供者がおのおの論文化したものと、今年度新たにこのテーマの範囲で加えたものとで特集を組んだ。授業で議論を重ねたため、共同作業的な部分も含まれていることを一言付け加えておく。